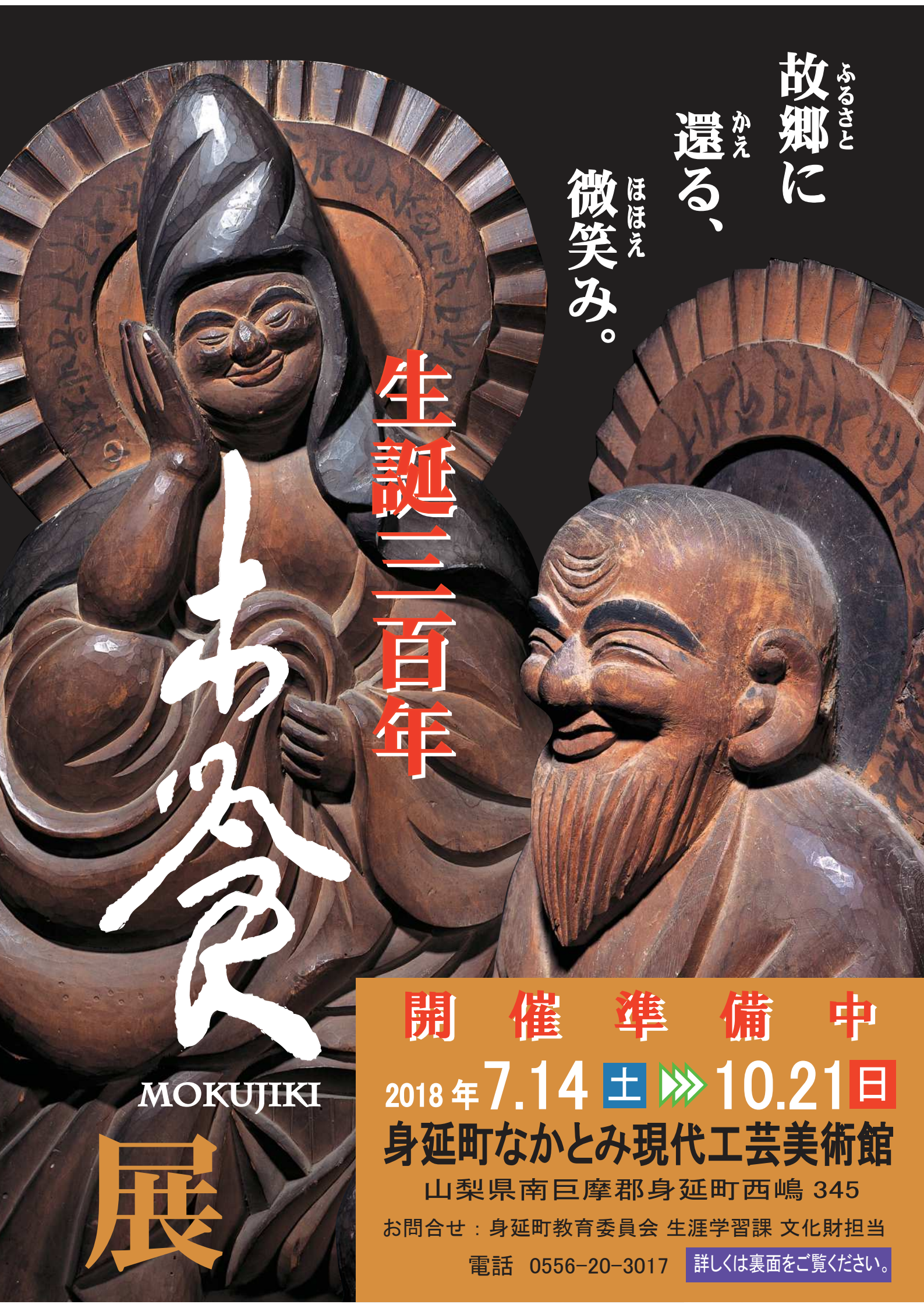
故郷(ふるさと)に
還(かえ)る、
微笑(ほほえ)み。
生誕二百年
木食
MOKUJIKI
展
開催準備中
2018年7.14土 10.21日
身延町なかとみ現代工芸美術館
山梨県南巨摩郡身延町西嶋 345
お問合せ：身延町教育委員会 生涯学習課 文化財担当
電話 0556-20-3017
詳しくは裏面をご覧ください。

身延町なかとみ現代工芸美術館　開館 20 周年記念事業

（仮称）生誕三百年 木喰展 ～故郷に還る、微笑み。～

木喰は享保３年、西暦１７１８年、甲斐国東河内領古関村、現在の山梨県身延町古関丸畑、伊藤六兵衛の次男として生まれました。１４才で故郷の丸畑を出奔した木喰は、２２才で出家した後、４５才で常陸国の木食観海の弟子となり、木食戒を受けます。木食戒は師から弟子へ口伝により継承されるもので正確な内容はわかりませんが、穀類や煮たものを食べない、単衣で重ね着をしない等が伝えられています。

５６才で日本廻国の旅に出立した木喰、旅先で相次ぐ天災や疫病、飢えに苦しむ人々を救うため、６１才より仏像を彫り始めます。８０才で一千体、９０才で二千体の造像を誓願し、文化７年（1810）に９３年の生涯を閉じるまで各地に多くの像を遺しました。その像は、円空の鋭い彫りとは対照的に丸みがあり、独特の微笑をたたえ、晩年の作は満面の笑みを浮かべます。

寛政１２年(1800) ８３才のとき、日本廻国の大願を果たしてふるさと丸畑へ戻った木喰は、村人に請われて四国八十八霊場の本尊を一堂に安置するため、四国堂仏の造像にとりかかります。造像期間は 9 ヶ月、実に 3 日に一躰の速度で彫られ進められたことにとなります。木喰の生涯で最大の群像彫刻を助けるため、はじめは村人も協力しましたが、農繁期の忙しさから次々と離れていき、最後には 13 人になってしまいました。現在、丸畑の 2 軒の家に 2 躰ずつ仏像が安置されていますが、それらは木喰に最後まで協力した礼に分け与えられたと伝わります。四国堂仏は大正時代に諸事情により丸畑より流出してしまいますが、そのうちの地蔵菩薩(左写真・日本民藝館所蔵)が大正１３年(1924)、後に民藝運動を起こした思想家、柳宗悦の目にとまり、木喰仏が世に出るきっかけとなりました。

また、木喰は旅の途中、６００首を越える和歌を詠んでいます。代表的な歌に、「まるまると　まるめまるめよ　わが心　まん丸丸く　丸くまん丸」があります。これは小泉元総理が官邸メールマガジンで引用し、折に触れてこの歌を思い返し、冷静な対応を心がけていると紹介したことで有名になりました。この他に「わが心　にごせばにごるすめばすむ　すむもにごるも　心なりけり」という歌もあり、現代人がとかく忘れがちなこころの尊さをしみじみと感じさせます。

年齢を重ねるにしたがって輝きと人間味を溢れさせていく仏像や書画、和歌の作風は、木喰自身の生き様と相まって今なお多くの人々を魅了してやみません。町はこの貴重な文化遺産を後世へと伝えるべく、昭和６１年(1986)に木喰の里微笑館を開館し、木喰の遺徳の顕彰に努めてきました。微笑館へ訪れる県内外の木喰ファンにとって生誕地丸畑は聖地そのものです。

来年、２０１８年は木喰生誕三百年の記念すべき年です。本町はこの節目の年に、なかとみ現代工芸美術館の開館２０周年事業として、7 月 14 日(土)から 10 月 21 日(日)まで、木喰展を開催する予定です。本展では、山梨県・新潟県・長野県・静岡県の仏像・書画約 90 点を展示する計画です。

木喰の微笑みが、永い時を越えてふるさとに還ってきます。木喰のように宗派を越えて庶民の信仰に深い影響を与えた人物はめったにいません。その遺徳はこれからの多くの世代にも受け継がれる事でしょう。「夢の世を　夢でくらすな　夢さめて　植えおく種は　後の世のため」、来年の展覧会が、木喰の植えおいた心の種にふれる、そんな契機になることを祈ります。

身延町教育委員会　生涯学習課文化財担当